様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１７３０８

研究課題名（和文）IRTを用いた自尊感情測定に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on self-esteem measurement using Item Response Theory

研究代表者
並川　努（NAMIKAWA, Tsutomu）

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：１０６１３７２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：心理学をはじめとした多くの分野で用いられる自尊感情について，Item Response Theoryを適用した分析を行い，課題を整理した。まず，自尊感情尺度を用いた研究についてレビューを行うとともに，実証的な調査を行い，翻訳の違いによって測定機能に差異が生じていることや，同じ尺度を用いた場合に回答者の年齢による差異が見られるかなどを検討した。これらをもとに今後の自尊感情尺度を用いた研究の課題が指摘された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
心理尺度を用いた測定は，狭義の心理学に限らず，医療や教育，産業など様々な分野の現場でも用いられている。本研究は，その際に尺度の表現や，回答者の発達段階などが測定にどのような影響を与えるのかを，多く用いられている自尊感情尺度をもとに検討し，測定の課題などを整理した。本研究の成果は，自尊感情に限らず，他の尺度を活用する際にも活用可能であり，より精緻で負担の少ない測定の開発などに寄与できると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the measuring function of the self-esteem scale.Study 1, we reviewed Japanese journal articles using RSE.In Japan, there are multiple Japanese versions of RSE. Study 2 applied IRT to examine the differences between the three Japanese versions of Rosenberg self-esteem scales. In Study 3, We investigated the differences of RSE's measuring functions between generations.The implications of those findings for future research using the self-esteem scale were discussed.

研究分野：社会科学

キーワード：自尊感情　IRT　心理尺度

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

自尊感情（自尊心；self-esteem）は，「自己に対する肯定的または否定的態度（Rosenberg，1965）」を指し，さまざまな研究で取り上げられてきた概念である。精神的健康や適応の指標として扱われることも多く，心理学のみならず周辺領域の研究や実践の場においてもたびたび利用されている。また，近年は自尊感情を扱う研究数が増加傾向にあることが指摘されたり，日本人の自尊感情が低下している可能性があることが指摘されるなど，自尊感情に関する議論も散見される。また，教育の現場でも自尊感情が重視されるなど，ニーズが高い概念であることが示唆される。

自尊感情は心理尺度を用いて測定されることが多く，その中でも Rosenberg による自尊感情尺度（以下，RSE）が用いられることが国内外を問わず多い。しかし，その測定に関しては，以前からさまざまな問題点が指摘されてきたが，利用される頻度に比べると，詳細な議論がなされることは多くないのが現状である。そこで，本研究では，IRT（Item Response Theory；項目反応理論）を適用したアプローチによって自尊感情尺度の測定機能に関する諸問題について検討を行うこととした。

２．研究の目的

本研究では，これまでの研究で浮かび上がってきた自尊感情尺度の課題のうちいくつかの点について検討し，自尊感情尺度の分析を通して，尺度を用いた測定において幅広く援用可能な知見の獲得を目指す。

まず，その前提として，自尊感情尺度の日本における使用状況をあらためて整理し，どのような尺度が，どのような形で使われることが多いのかを具体的に示す。そのうえで，課題となる点を絞り，実証的な調査を通して検討を行うことを目的とする。検討を行うのは以下の 2 点である。

1 点目が，邦訳による違いである。RSE には複数の邦訳版が存在し，研究によって異なる訳が用いられているものの，同じ自尊感情尺度の得点として扱われている。しかし，表現が異なることによって，測定にも何らの影響を与えていることが予想される。そこで，多く用いられている RSE の邦訳版間で，項目の特性の違いを検討し，どういった表現が測定に影響を与えうるのかを明らかにする。

2 点目が発達的変化による影響である。自尊感情に限らず，パーソナリティなどの発達的変化を検討する際に，特定の尺度をさまざまな年齢の調査協力者に回答してもらうケースは，少なくない。しかし，同一尺度であっても回答する者の発達段階によって，個々の項目が持つ意味が異なるなどして，測定機能が変わる可能性がある。とくに自尊感情尺度は，年齢によって平均値が異なることが示唆されているが，それが発達的変化によるものなのか，項目の測定機能の影響もみられるのかについては直接的に検討したものはあまり見られない。そこでこれらを DIF（Differential Item Functioning；特異項目機能）検出の方法を用いて検討し，発達的な変化測定を行う際の課題を整理する。

３．研究の方法

はじめに国内外の自尊感情に関する研究について再度レビューを行い，自尊感情の定義や測定範囲を再検討した上で，以下の検討を行った。

（1）日本国内の自尊感情使用状況

日本国内の自尊感情使用状況を整理するために，論文を抽出し，整理を行った。対象は，並川他（2010）と同じの 6 誌とし，巻号は並川他（2010）で対象となった以降のもので，2018 年 3 月時点で J-STAGE 上で公開されていたものとした。

論文の抽出は以下の手続きで行った。まず J-STAGE の検索機能を利用し，対象 6 誌について「Rosenberg」という語が含まれている論文を抽出した。次に，抽出された論文に一つひとつについて，調査・実験の中で Rosenberg 自尊感情尺度の日本語版が利用されているかを確認し，最終的に 61 論文を対象論文とした。

（2）邦訳による違いの検討

日本で多く用いられている RSE 邦訳版間で，項目の測定機能の違いがどのように異なるのかについて検討を行った。RSE の邦訳版 3 種類（山本他訳・星野訳・桜井訳）を取り上げてデータ収集を行い，各翻訳間でどのような違いがあるのかを検討した。全体でパラメタの推定を行うため，第 1～5 項目まで（前半）と，第 6～10 項目まで（後半）を分けて組み合わせた 9 つの版（A～I）を作成して，データ収集を行った。（A：前半星野訳・後半星野訳，B：星野訳・桜井訳，C：星野訳・山本他訳，…，I：山本他訳・山本他訳。）

20 代の男女を対象にウェブでの調査を実施し，各版 200 名分ずつ，計 1800 名分のデータを収

集した。調査協力者の平均年齢は 26.0 歳（SD=2.5）であった。調査協力者は，一人あたり A～I の版のいずれかがランダムに割り当てられ，10 項目 4 件法のみに回答した。

（3）発達的変化による差異の検討

RSE を用いて横断的な調査を行った際に，回答者の年齢によって項目の測定機能が異なるようなことが生じるのかについて検討を行った。ここでは，DIF 検出の方法を適用し，個々の項目パラメタを検討した。

調査は，20～29 歳，40～49 歳，60～69 歳の 3 つの世代の男女 150 名ずつ，計 900 名を対象とし，ウェブ調査の形で行われた。用いた尺度は，RSE の山本他訳の 10 項目であり，オリジナル版に合わせて 4 件法の形で実施した。

４．研究成果

（1）日本国内の自尊感情使用状況

対象の 61 論文について，a）用いている翻訳，b）回答の選択枝数，c）使用項目数の 3 点を確認し，集計を行った。その結果,山本他（1982）による訳が最も多く，44 本の論文で用いられていた。2 番目以下は，櫻井（1997，2000），Mimura & Griffiths（2007），星野（1970）の順であった。先行研究同様に，最も多く用いられていたのは山本他訳であったものの，以前よりも星野訳が相対的に少なくなり，Mimura & Griffiths 訳が多く用いられるようになっていた点は，新たな傾向であった。

次に，採用されていた選択枝数について検討を行った。Rosenberg（1965）のオリジナル版は 4 件法であり，櫻井（2000），星野（1970），Mimura & Griffiths（2007）は，いずれもそれに従って 4 件法を用いている。そのため，それらの訳については 4 件法が採用されることが多くなっていた。一方，山本他（1982）では，5 件法が採用されているため，それを利用した論文でも 5 件法が採用されるケースが最も多くなっていた。また，7 件法などが用いられるケースもあり，同じ Rosenberg の尺度であっても，採用される選択枝数が一貫していない点は先行研究と同様に継続して見られた。

使用項目数については，10 項目すべてを利用するのではなく，第 8 項目を削除し 9 項目のみが使用されるケースが 9 件見られた。そのほとんどが山本他訳を用いた研究であり，山本他訳を用いた論文のうち約 18%で第 8 項目が削除されていた。第 8 項目が自尊感情の測定においてうまく機能しない場合があるという点は多くの研究において共通してみられていると推察される。

（2）邦訳による違いの検討

日本で多く用いられている RSE 邦訳版の 3 種類（山本他訳・星野訳・桜井訳）の間で項目の測定機能の違いについて検討するため，1800 名分のデータを収集し，分析を行った。IRT の分析については， EasyEstimation Ver.2.1.2（熊谷，2009）を用いた。

まず，訳によって各項目の平均値が異なるかどうかについて，1 元配置の分散分析を行ったところ，7 項目（第 1，2，5，6，7，8，9 項目）で訳による有意な差が見られた。第 1，第 2，第 6 項目は星野訳が，第 5 項目は桜井訳が，第 8 項目は山本他訳がそれぞれ他の 2 つに比べて有意に低くなっていた。また，第 7 項目は山本他訳が，第 9 項目は桜井訳がそれぞれ他の 2 つに比べて有意に高くなっていた。

次に，IRT のパラメタ推定を行った。3 種類の訳の計 30 項目について Graded Response Model を適用し，IRT の項目パラメタを算出した。その結果，同じ第 1 項目でも，星野訳「私はすべての点で自分に満足している」a=1.53，b1=-0.95，b2=1.34，b3=2.98，桜井訳「私は自分に満足している」a=1.88，b1=-1.21，b2= 0.47， b3=2.32，山本他訳「だいたいにおいて，自分に満足している」a=1.63，b1=-1.40，b2=0.49，b3=2.32 とそれぞれ項目表現の違いに対応して，パラメタが異なることが示された。

また，翻訳ごとの 10 項目についてテスト情報量を算出した結果を Figure1 に示した。θ＝±2.0 の範囲では，山本他訳の 10 項目が最も高い値を示していた。

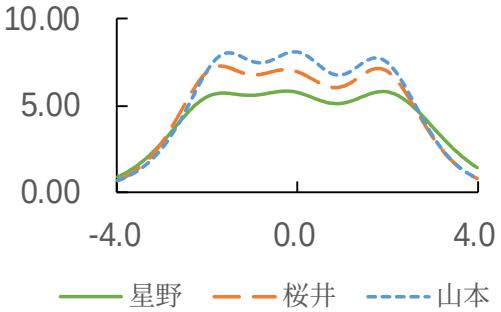

Figure 1 テスト情報量

（3）発達的変化による差異の検討

RSE の測定機能が発達段階などによって異なるかを検討するため， 20～29 歳，40～49 歳，60～69 歳の 3 つの世代について，RSE の山本他訳の 10 項目を用いてデータ収集を行った。

まず，自尊感情尺度の得点を算出し，世代間で平均値が異なるかを比較したところ，有意に上の世代の方が平均値は高くなっていた（$F(2, 897)=44.14$, $p<.01$）。また，項目単位でも，10 項目中 9 項目で世代間に有意な差が認められた。全体的にみると，年代が上になるほど，平均値が高くなっており，多くの先行研究と同様の傾向が確認された。

次に，EasyEstimation（熊谷，2009）を用いて，項目パラメタの推定を行い，3 世代の比較を行った。また，DIF 検出の方法を適用し，発達によって項目の機能に差がみられるかを検討したが，いずれの項目においても指標 K の値が大きい項目は見られず,DIF があると認められる項目は見られなかった。

＜引用文献＞

星野 命 (1970). 感情の心理と教育（二） 児童心理，24，1445-1477.

熊谷龍一 (2009). 初学者向けの項目反応理論分析プログラム EasyEstimation シリーズの開発 日本テスト学会誌，5，107-118.

Mimura, C. & Griffiths, P. (2007). Japanese version of the Rosenberg Self-esteem Scale: translation and equivalence assessment. Journal of Psychosomatic Research, 62, 589-594.

並川 努・脇田 貴文・野口 裕之 (2010). 日本における自尊感情尺度使用の状況と課題 教育心理学フォーラムレポート，FR-2010-01.

Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press.

桜井 茂男 (1997). 現代に生きる若者たちの心理――嗜癖・性格・動機づけ―― 風間書房

桜井 茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究，12，65-71.

山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究，30，64-68.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 並川努	４．巻 1
２．論文標題 日本におけるRosenberg自尊感情尺度の使用状況について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 創生ジャーナルHuman & Society	６．最初と最後の頁 79-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 並川努・脇田貴文・小塩真司・茂垣まどか・岡田涼
２．発表標題 Rosenberg 自尊感情尺度の翻訳による差異の検討
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考